

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 魯迅『阿Q正伝』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を800字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

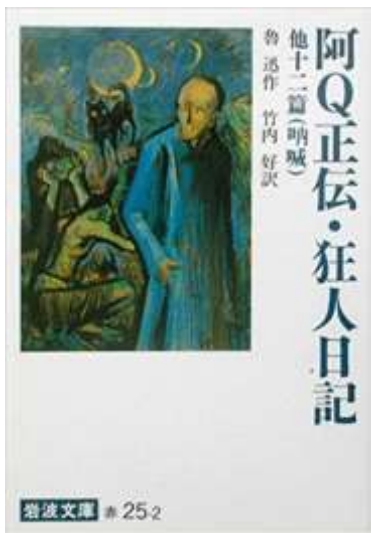
『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cggd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄にPDFへのリンクを張ってあります。)



第54回のツイキャス読書会の課題図書は、魯迅の『阿Q正伝』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『阿Q正伝』感想文

実は、まだ全部読めていないのですが、阿Qという人は気の毒だなと思いました。

少しお調子者の所とか、あまり深く考えないで行動する所もあって、自業自得？な部分もあるけどすごく虐げられているなと思いました。

第四章 恋愛の悲劇の所はホントに可哀想に思いました。もちろん阿Qも、いきなり普段何とも思っていないような同僚のような存在のウーマに「おらと寝ろ」とか言ったら、ウーマにとってはかなりの恐怖だし、この人頭おかしいのかな？と思うけど、天秤棒で殴られ、五つの契約までさせられて、罰が少し重すぎるのではないかなと思いましたし、お金がないから布団を質に入れたり、すごく可哀想に思いました。

阿Qは、そんなに悪い人ではないと思うけど誤解されやすい人だったのかなと思いました。

阿Qのような弱い立場で、誤解されやすい人には住みにくい世の中だったのかな？と思いました。

あと、気になった所は阿Qが尼さんをすごく目の敵にしているような印象を持ったのですが、それが何故だか分かりませんでした。

(おわり)

「阿Qという友人」

最近、ある人に殴られた。

その時ふと、阿Qなら、「これは親がせがれに殴られたようなものだ」と考えたかもしれない、と思えた。ちよっと笑えた。

阿Qみたいにすぐ元気にはなれなかったけれど。

「本は友人」という言葉がある。

その意味が自分なりに飲みこめた気がした。

正しい意味かは分からないし、この感想文の文意に沿っているかもわからないけれど。

自分の考えから離れて、読んだ小説の或る人物の考え方で、現実の物事を考えてみる。

例えば「こんな時、阿Qだったらどうしただろうか…」などと。それで、少し気が楽になる。

また、そうやって考えている時、頭の中に友人がいるような感覚になったりする。(かなり抽象的な言い方でごめんなさい)

その感覚でも、少し気が楽になる。一人じゃない、と思えて、孤独がまぎれる。

そういう意味で「本は友人」なのかもしれない、と私は解釈した。

そんな、別の考え方だったり、友人の感覚だったり、がほしくて、私はこれまで小説を読んできたのかもしれない。

それは私自身、頭の固いほうだからかもしれない。

「考え方」に着目すれば、阿Qのそれは名人芸のようだ。こんな考え方もできるんだ、と感動した。

最後に、なぜ魯迅は阿Qという人物を描こうと思ったのだろう、と気になった。

私なりの解釈ですが、それは、魯迅にとって、阿Qが友人である、というような感覚を持ったからではないでしょうか。

(おわり)

「助けて」と言えたなら

阿Qは何があっても元気だ。なぐられても侮辱されても長く悩まない。なんとか都合のいい理由をつけて自尊心を保ち酒を飲んで忘れる。それはある意味生き抜くための、自分を守る術だったと思う。現代の社会においてもイジメられて会社に行けない大人や学校に行けない子供がいる。良い悪いは別にして阿Qはとにかくたくましい。

しかし私は読み進めていくうちに、どんどん悲しい気持ちになっていった。阿Qは自尊心の高さから周囲の人を憎み蔑む。浅はかな考えの阿Qは働き先の女中を自分のものにしようとして仕事をなくし、食うに困って盗みを働く。そして自分が革命党であると妄想する阿Qを、私は子供っぽいと思いながらも、強い自尊心が生み出す自分勝手な思想は、相模原の無差別殺人を思いおこさせ恐ろしくなってしまった

阿Qを救うものはなんだったのだろうか？

阿Qはいつもひとりぼっちだ。誰かに無条件に愛されたり愛することを知らない。話を聞いてくれる友達もいない。小説「坊ちゃん」にでてくる全てを受け入れてくれる「キヨ」みたいな存在がいたら阿Qの人生は変わったのではないかと思う。

しかし私は阿Qを非難することはできない。自分にも身に覚えのある心情がそこにたくさん描かれているからだ。自分が理不尽な思いをした時どうしたら自分の人生を肯定し、周囲の人を大切にしながら生きられるのだろうか？ それはとても難しい。自分自身にも問いかけている小説だ。

誰からも相手にされない阿Qは人に頼らずずっとひとりで戦ってきたように思える。最後、引き廻しに行く車の中で「助けてくれ」と言った阿Qがとても不憫に思えた。この言葉は阿Qが心の奥底にずっとしまっていた叫びのようだった。労働に勤勉だった阿Qをなんとか救ってほしいと思った。読み終わってどうにもならない報われない虚しさと寂しさが残った。

(おわり)

阿Qが求めなかったもの、受けなかったもの

現在の中国の事もわかりませんが、この作品の中の時代では社会保障だとか人権などというものはなく、仮に生活保護やベーシックインカムが存在していたとしても阿Qはどのように受給するか知らずにいるか、受給できたとしても酒代に消えるか、虚勢を張るための衣服に使っておしまいのような気がします。

せめて阿Qが読み書きをできていれば、と胸が痛みました。読み書きができる事を当たり前できない人々が今も世界中にいてそれ故に不当な扱いを受けている人がたくさんいるし、全ての人が等しく教育を受けられる世界はいまだに実現できていません。

「こどもはほめて伸ばせ」というのが現代社会の子育てにおけるひとつの考えの柱になっているような気がします。現に4歳と1歳半の娘がいる私も子供たちをよくほめるように努めています。ただほめてばかりではダメ。いけないことをした時はわかりやすい言葉や表情や身振り手振りで叱ることも忘れません。ただ子供はすぐ泣くし、集中力も続かないのでなかなか伝えるのが難しいですが。

また、子供が抱っこを求めて来た時はこちらが疲れていてもそれに応じるようにしています。

阿Qはその生い立ちについてわからない点ばかりで、想像でしかありませんが女の体を求めることはあっても人を愛するという経験が乏しいと推測されます。趙家の女中に手を出そうとし泣きながら逃げられ、それがばれた後、頭をぴしゃりぴしゃりと叩かれ、仕事を貰えなくなるという罰を受けることはあっても、彼自身が罪を償うだとか周囲が彼を改心させようとしたり、許すこともありませんでした。

お稲荷さんも彼にとっては只の寒さを凌ぐ為の寝床であり、信仰や安らぎを求めることもありませんでした。

人を愛するとか愛されるとか、信頼する、信頼される、人を許す、人に許してもらう。そんな経験が足りなかったであろう阿Qのようなヒトが目の前にいたらどうするか？そもそも自分にそれができているか？問いかけてくる作品だと感じました。

では最後に。手を縛られて市中を引き回され、首を切られそうになっているのに「そんなこともあるかもしれない」と思ってるそのあなた、あなたが受けてるの、不当な扱いですから！残念！

周りで見ているだけの狼の眼をした人達もまとめて斬り。

(おわり)

エヴァタさんのブログです。弱視目線 <https://blogs.yahoo.co.jp/childrenkaneyou>

愛すべき我が阿Qの最高の人生

という皮肉な言葉が浮かんできた。そしてどこまでも虚しい。
実際書かれていたのは我が阿Qの悲恋と悲運に哀歌。あっけない終わり。
笑えるか笑えないかを問われ、背中がぞくっと凍った。

職を失い腹ペこで町を歩く阿Qの観察にこうある。

「食さがし」に歩いていると、なじみの酒屋、なじみの饅頭が眼につくが、そのまま通り過ぎる。立ち止まらないし、ほしい気もしない。かれが探し求めるのは、そんなものではない。それが何かは自分でもわからない。
(岩波文庫第 87 刷・126P)

それが何かを考えればよいのだが、阿Qにできるはずがない。
お酒を飲んで酔っ払い、ぐっすり眠ってすっかり忘れてしまう。
ああ、残念な人生。
そして気づく。わたしの中に「阿Q」的な部分はある、と。
そうやって思いながら読んでいるとやりきれなかった。言っても仕方のない言い訳ばかりが降りてくる。

もし、自分の中の「阿Q」的な部分を認めないとすると、阿Qを銃殺し、なお笑った未荘の人々と同じく愚かな庶民に成り下がる。
成り下がるなんて言えるのだろうか、くだらないプライドと対面することになり、またやりきれなくなった。

人間万事塞翁が馬――

人生、先のことはわからない。吉凶はどちらも訪れる。
だけど、1度しか経験できない人生、喜んだり悲しんだりするのが毎日。

読者へゆだねられた問いは文中に沢山込められていて、わたしはまだ答えが出せていない。
知性や教養は必要。そしてそれを使う人間の品性も。
阿Qのあっけない人生を繰り返し読んでみて
何年かかってもずっと考えてゆかなければいけない大きな宿題が心に残った。やっぱり笑いたくても笑えない。

(おわり)

「弱肉強食社会にならないために」

主人公の阿Qは、惨めな毎日を送り、惨めな死を遂げた。

彼を助けようとする人物は一人も登場しなかった。

弱肉強食の世界。弱者は心の底では強者を憎んではいても、抵抗する意思はなく、解決の手段も知らない。権威ある強者は貪欲で、隙あれば弱者の骨の髄まで搾り取ろうとするが、その行為は咎められもしない。弱者同士のいたわり合いもなく、弱者はより弱者に対して強者であろうとする。主人公の阿Qも然り。また、最初は弱者の味方であっても、欲望に負け、いつの間にか強者にすり替わっている。

この話は、人間の醜い欲望が堂々と書かれていた。人間の本性は？ 人間はやはり生まれながらにして罪深いのであろうか？

今の日本はどうだろう？

日本に革命はまだ起きていない。諸外国と比べて過去に大きな差別社会はなかったし、戦後は、憲法に自由及び権利の保障、個人の尊重、法の下での平等が明示されている。また、社会保障制度や義務教育制度も整えられている。この状態が続くうちは弱者による革命は起きないはずだ。

しかし、現実には目を向けると、格差を含む差別により生じた不満からの事件が増加している。犯人が刃をより弱者に向けているのはこの話に似ている。革命は起きなくても、日本の魅力である「安全な国」のレッテルが、じわじわと内側からはがされそうになっている。

私にできることは何か？

私も欲深い人間だ。心に油断は禁物だ。私は大きなことはできないが、身近なところでお互いの尊厳を守りながら助け合うことがみんなの幸せに繋がると信じて生きていこうと思う。

そして、政府には、自由社会の中で差別や不公平が起きないように、政策を練ってもらいたいと思う。

人民も、政府も、役人も、日本を愛していることに間違いはないと思うので、意見や知恵を出し合い協力すれば希望のある社会に向かって進んでいくと信じている。

(おわり)

『悲しみは川のように』

阿Qの人生は、「流れる川」のようだ。時々岩にぶつかっては、また方向を変えて下流に向かって流れ続ける。

阿Qの精神的勝利法は、気つけ薬のようなものだ。言葉を巧みに入れ替えるオリジナルの論法で、最後に自分を勝者に祭り上げて一連の出来事を終える。「今自分はここにあります」ことを誰からも承認してもらえない。行き当たりばったりで、何か騒ぎを起こしては、土地廟のサヤに戻ってくる。これを繰り返しているうちに、革命沙汰に巻き込まれて、汚名を着せられた。

薄ぼんやりとした疑惑が、喪服を目にして「死」が現実となってしまった。その瞬間の、阿Qの鼓動がドクドクと伝わってくるようだった。

なぜ阿Qの人生が「流れる川」になったのか。私は、阿Qが文字を持たないことに関係していると思う。出来事と自分の気持ちとがゴッチャになって、どちらが自分の本質なのかが分からなくなってしまう。そんな印象があるからだ。強烈ではないにしろ、読んでいるうちにそのインパクトが心にジワジワと染み入ってくる。

振り返って、自分の気持ちを文字にすることの大切さをあらためて感じる。自分の気持ちを文字化しないと、いつの間にやら川の流れるに任せてしまっているのは、文字を習得している私にも言えることだ。

「人として生まれた以上、たまには文字を習うことだってないわけではない」例えばそんな一時期が阿Qにもあったなら、処される前に渡された紙と筆で、せめて一言書けたかもしれない。阿Qは、何と書いただろう。

「我こそは革命で処される第一人者なり」

どうかな？

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 ふわりふわり 』

阿Qに、20年ぶりに再会できた。最初に出会った頃はほんの子供で、父親の文学全集を背伸びして読んだのがきっかけだった。当時は「阿Qって、へ～んなの！」てな感じで、字面以上のものを感じていなかった。

でもね、阿Q…今回は違ったよ。大人になってわかったけど、こんなに哀しいポジティブシンキングの使い方があったんだね。

昨今、あらゆる意味で暗い時代を反映してか、世間は「ポジティブシンキング！前向き！」を市井の人々を鼓舞する。確かに、ネガティブに生きるより一理あると思う。でも、それは未来志向を含んでいる場合であって、阿Qは後ろ向きなポジティブシンキングだった。自らの現状を把握しようとせず、ただ、自尊心を保つことが一番だった。今になって、阿Qなりの精一杯の処世術だったと理解できる。でも、自分より弱い人間を軽蔑し、他人を尊重しないことの言い訳にはならない。その瞬間は胸がすくだろうが、現状に安住するだけで向上心にはつながらない。だから、阿Qは阿Qのままだった。

虱取りに負けて暴力をふるうのもしかり、結婚したいからと女中にムチャぶりするのもしかり、革命家になれば旦那衆をやり込めると短絡的に考えたこともしかりだ。

ただ、私は阿Qを全否定できない。たぶん、私にもどこか阿Qの部分があるからだろう。後継ぎの心配から女中に言い寄る際や自らを革命党だと思い込む際の心境は「ふわりふわり」だ。考えているようで、ただ流されているだけだった。自らがふわりと流されていることに、一番気が付かないのは自分自身だ。阿Q自身が私たちの「あるある」なのかもしれない。

この小説は、辛亥革命前後の中国を風刺しているとされている。当時の中国を憂いて、魯迅が生み出した阿Q…。

でもね、最後に処刑される際、「人として生まれた以上、たまには首をちょん切られることだって、ないわけではない。」って言ってたね。ここだけは、かっこよかったなあ。哀しいポジティブシンキングだけど。

ただ、阿Qが最後に群衆の中に見た、鬼火のような棘のある合体した眼に、自らがならないように…え、もうなってるのか。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「中国の近代化」

1911年辛亥革命によって、近代化を目指していた清王朝が崩壊した。中国の歴史は皇帝に天命が下るといふ易姓革命論である。今までの中国なら、清の宣統帝が天命から見放されたということであった。しかし辛亥革命は、天命そのものを否定する、人民主権の革命であった。満州人の王朝体制から、アジア初の共和国体制に変わり、近代国家としての中華民国が生まれた。しかし、庶民にとっては、政治体制の変化は何のことかわからない。

だから、革命指導者、孫文は、庶民に向けてわかりやすいように、明王朝への復古を説いた。薩長連合が朝廷を担ぎ上げて世俗権力の倒幕した明治維新と同じ構図だ。

『白兎、白鎧』というのは、日本の『錦の御旗』だ。反満州人の意識があった漢民族の民族意識を政治利用して、復古を偽装しつつ三民主義(民族主義・民権主義・民生主義)のもと革命が進められた。

趙^{チヤオ}家も阿Qも田舎の人間である。都市に住むのが都会人だ。しかし、田舎に住もうが都会に住もうが、皆が辛亥革命の意味することをわかっていない。

その悲劇が書かれている。

近代の革命は、政治権力が人民に移ることだ。清王朝の支配階級は、急激に没落した。

《貧乏人？—— おまえはおれよりよっぽど金持ちだ》という阿Qの言葉に、趙^{チヤオ}白眼^{バイエン}ががっかりするのは、革命によって彼らの財産が、没収されることを暗示している。

城内に住む拳人旦那は、清王朝の文官である。革命を恐れて財産を、趙家に隠した。

拳人や趙一族金持ちは、革命によって私有財産を失うことを恐れている。彼らは、革命分子である阿Qを恐れたのである。人民主権とは、阿Qの時代のことだ。

革命を騙り、略奪によって私腹を肥やす人間がいたため、阿Qも何も考えず、その一味に自然と加わったのである。

庶民の頭の中だけで革命が進行し、ならずもののテロルが横行し、国土が大恐慌《グランプール》を迎える。

あとは革命と反動のジグザグ時代だ。

何万人もの文字の読めない阿Qが革命運動に翻弄されて無駄死にしたのだ。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343